今、政治家を問う

元政経研究所所長　秋山和宏

はじめに

わが国は、一九九〇年以降の「失われた一〇年」と称される停滞状況を、未だに克服しえていない。その原因は種々指摘できるであろうが、とりわけ政治に帰するところ大である。なぜなら政治とは国家・社会を形成し、経営する役割を担うものだからである。そして、言うまでもなく、第一義的に政治の任に当たるのは政治家であるから、現在の停滞をもたらしている責任の多くは政治家にある。その上折悪しく、近年政治家の「劣化」を憂うる声が高まっている。今こそ政治家の識見・技量・質が問われる所以である。政治における政治家の果たす意義と役割の重要性に比して、政治学における政治家研究はこれまで十分であったとは言い難い状況の中政経研究所では、三年間かけて「現代日本における政治家の研究」を行ってきた。

平成二四年一二月二二日に政経研究所主催で行われた「今、政治家を問う」と題したシンポジウムは上述の問題意識に立ち、研究の総括的位置づけをなすものであり、「政治家の実態」を踏まえつつ、「あるべき政治家像」を解明しようとしたものである。

基調報告をしていただいた河野洋平先生のお言葉は、長い政治経歴と衆議院議長等の要職経験に裏打ちされたもので、示唆に富むものであった。パネラーとしてご出席いただいた大島九州男、小野晋也、白眞勲、福島みずほの四人の先生方はいずれも政治家（現職・元職の国会議員）として一家言をお持ちの方々にふさわしく、議論が活発に交わされ、シンポジウムは盛況のうちに終わった。出席者諸氏の貴重なご意見を是非とも今後に活かしたいとの思いで、本号に当日の内容の一部を活字で記録に留めることにした。

なお日本大学は伝統的に多くの政治家を輩出してきた大学であり、今後とも政治の世界に有為の人材を送り出したいとも思っている。今回のシンポジウムがその一助となれば幸いである。